

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

葉桜や停車の長き縄電車

岡本とも子

(評)ほんとに可愛いく愉しい句である。葉桜の季節は寒くなく暑くもない。快適な時季、さわやかな風を身体全体で感じるときである。そこには既に桜花の賑いはなく、子供達の遊びの場。運転手は「ともちゃん」車掌は「ぼく」だ、縄の電車に時刻表はない。「発車オーライ」明るく、あかるく動きは始める縄電車。

孫土産五月の風と二本の歯

小島 良

(評)外孫であろう、五月の節句に、おばあちゃんの家に孫を見せに帰って来た母親の姿である。素材は何でもよい。情景が理解できれば、それが俳句である。土産として何もないが、元気に育った孫の体、生えはじめた二本の歯、それがいちばん、何よりの祖父母への土産。情景がよく理解できる句である。

若葉して山の傾斜のふくらめり

片岡 包女

(評)春の山は明るくて楽しい。若葉しては、つい先頃まで枯木のような存在だった木々に若葉が出た、そしてその情景が山の傾斜をふくらませたのである。春という季節の把握に作者の情感が込められた句。

唾呑んで鼓膜のもどり山笑ふ

井上 郁子

(評)唾を呑み込んだ何かのはずみで「つん」と詰まっていた耳が開いて鼓膜が正常になったという句意。「山笑う」は初春の季語。最近母の日、父の日、敬老の日、歯、目、耳等、数字のゴロ合わせで、いろいろの日が出てくるが、三月三日は耳の日であるそうだ。この日に酒を飲むと聾が癒えるという話を何かの本で見したが「山笑う」と三月の季語が耳との取り合わせになっているのでは……と、それは下司の勘繰り飛躍のしすぎであろうか?…。

ひらひらと風に光りぬ柿若葉

川村千図子

(評)平明で情景のよく見える句である。黄緑の柿若葉は如何にも弱々しく、秋の堅い柿の葉から想像もできないが、ひらひらと風を返し光を返しながらも、その葉の間に秋の実をつけている。見えたまま、あるがままにまとめたことよって情景を鮮明にしている。

初夏の蝶赤信号を渡りけり 間 浩太

廃るもの残すものあり麦の秋 竹崎 光子

夏に入る話題に上ぼる水不足 川村 博子

Tシャツの並ぶ砂浜風五月 友草 水月

この里に一子あいけり鯉幟 大川 節弥

薔薇一輪挿して食卓華やげり 森元二美子

雲一つ流れて峽の代田澄む 刈谷 志津

あくまでも故郷めぎす蝸牛 大西 昇月

豊予海峡沖風いでる夏立つ日 植田 紀子

ままごとの皿に変わりて柿若葉 渡辺万利子

椎の花一と雨欲しいと呼んでいる 筒井 眉躬

薫風や万葉人を恋ふる旅 中野 好子

窓越しに元気をもらう柿若葉 森岡 照月

ばら一面浮かしていたる出湯かな 川上こよね

若葉風うっかり過ぎし誕生日 津田 久美

春昼に一人あることの不安持つ 立木ゆう子

遠山に夕日ほんのり余花染まる 川村 愛

聴診器きらりと立春年重ね 伊藤 たみ

ペランダに揚げて手に触る鯉幟 弘瀬うき子

葉桜や勤めに慣れし孫の顔 筒井 文

葱畑おぼろの月に照らされて 楠目 哲郎

蝌蚪生る荒れ放題の棚田にも 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」

締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月のことも川柳

あいさつは ころをいやす おまじない
枝川小2年 蔵川 真実

おんだんか すすみずきてね あああついで
下八川小3年 宗我部浩大

落語部は おわらいとって うれしなき
神谷小4年 坂本 志織

春になり 山はピンクの きものきる
伊野小6年 上田 由夏

告白は 勇気あれば できるんだ
伊野小6年 大野 一成

弟が さわげば母も おこりだす
伊野小6年 山崎 隆正

青い空 世界の果てまで 続いている
川内小6年 國澤 優花